

序にかえて

食のことづて¹⁾

女子栄養大学教授 渡 邊 早 苗

坂戸キャンパスの真中に、綾先生が植えられたという染井吉野の大樹があります。入学式の頃には、満開の花を咲かせ、この桜をくぐって、綾先生の“食は生命なり”の道へと導かれています。

桜と言えばすぐ桜餅や桜湯が連想されます。“花びら餅”（菱葩餅：ごぼうと白味噌餡とピンク色の餅を、餅又は求肥で包んだ和菓子。平安時代の新年行事「歯固めの儀式」を簡略化したもので、600年にわたり宮中のおせち料理の一つ）や“桜湯”（塩漬けにした桜の花を湯呑みに入れて湯を注いだ飲み物：見合いや婚礼の席で、その場を取り繕ってごまかす意味の茶を濁す事を忌み嫌いお茶の代わりの飲み物として用いる）にはその時々々の人生の情景が思い出としてよみがえり嬉しいものです。

山梨県白州町では、桃の花が一面に咲く頃に役場や住民への説明に出かけ、実のなる時期には大勢の学生さん達と栄養調査を行い、美味な果実を存分に頂きました。信州安曇野では可憐な花が咲き誇るソバ畑を観て、ソバの味に舌鼓を打つなど、花を観れば必ずやその結実としての食べ物思い出され、そしてその時の職場や家庭の事共を思い出します。

人は、楽しい時も苦しい時も、悲しい時でさえ食します。臨床の場では、人生の終末が近づくと、食を通して人生を振り返る人、ひと口の食事明日への希望を見いだす人がいます。細い手で箸を持ち、刺身を口いっぱいほをばって、目を子供のように輝かせ、生きている自分をかみしめている高齢の入院患者さんを、緩和ケア病棟で目のあたりにした時、喉頭がんで術後、PEG（経皮内視鏡胃瘻増設）を施行され、1年余り在宅療養していた患者さんが亡くなる時、1匙で良いから粥を口から食べたいと言ったと聞いた時、事故で頸椎損傷の若者が好きな麺類を箸で食べたいと、動かぬ指を必死でリハビリする姿を見た時、食べることは生きることになんかにつながっているとあらためて“食は生命なり”の意味を心底受け止めたものです。

^{もがみあ}最上和えという料理があります。色鮮やかに茹でた枝

豆と大根おろしの和え物です。庄内平野を豊かに流れる最上川の情景とダダ茶豆畑が眼に浮かぶ様です。視覚障害の子供たちへの給食メニューにシンデレラシチューというネーミングの料理があります。どんな料理なのかと待ち遠しくわくわくします。給食時に一口食べたら子供たちが、「魔法使いが……」、「12時になると……」と言いながら楽しそうに食べる事でしょう。食は希望や楽しみをもたらしてくれます。食する事は、生きている証し、季節を感じて欲しい、感動して欲しいと思わずにはいられません。

40歳の半ば頃、吟を習うことにしました。最初に覚えた詩は、「尋胡隱君（こいんくんをたずぬ）：高啓（明1336－1374）」でした。「渡水復渡水 看花還看花 春風江上路 不覺到君家」（水を渡りまた水を渡り 花をみ また花をみる 春風江上の路 覚えぬ君が家に到る）という詩です。何の変哲もない情景を詠んだ詩ですが、吟じると、まったく抑揚のある響きは、気持ちが晴れやかになり心が和みます。そして、訪ねた家で2人の盟友が粗肴を前に酒を酌み交わして、談笑している情景が眼に浮かぶのは自身が酒を嗜むからでしょう。

別れの宴が催される席で、美味しい料理と酒を堪能した後の余興では、偶に私の好きな范雲（梁451－503）の「別詩」²⁾を謡わせて下さいと頼んでみます。「洛陽城東西 長作經時別 昔來花如雪 今去雪似花」（洛陽城のひがしにし 長らく時をふるの別れをなす 昔來るとき 花雪の如し 今去るに雪花に似たり）と少しもじって吟じます。その昔、4月に着任された時、花は吹雪のようでしたが、今3月末の別れの時は、舞い落ちる雪が花のように見えますとの意です。いつでもどんな時でも思い出は、食と共に浮かんできます。

卒業式の頃には、綾先生の桜はまだ蕾ですが、膨らんでほんのり桃色かかっています。明日に向かって花開く日を待ち望んでいるように見えます。

綾先生のお導きを受けて今日を迎えました事に感謝申し上げます。

¹⁾ 本拙稿の題は、恩師西村薫子先生の御退職の折に出版されました「食のことづて」－栄養学実践の喜びの編集委員会（一粒の麦の会）より、御許可を頂きました。

²⁾ 正しくは、「昔去雪如花 今來花似雪」で、以前に友と別れた時の情景を思い起こしている詩です。